



TITLE:

イギリス革命論における反対者たち - 書評への反批判 -

AUTHOR(S):

堀江, 英一

CITATION:

堀江, 英一. イギリス革命論における反対者たち - 書評への反批判 -. 経済論叢 1965, 96(6): 439-449

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/133093>

RIGHT:

經濟論叢

第九十六卷 第六號

シェーカーズの衰亡……………穂 積 文 雄 1

ベルヌーイの効用指標……………鎌 倉 昇 20

「資金配分問題」と数理計画法……………浅 沼 萬 里 39

書 評

イギリス革命論における反対者たち……………堀 江 英 一 63

經濟論叢 第九十五卷・第九十六卷総目録

昭和四十年十二月

京都大學經濟學會

《書 評》

イギリス革命論における反対者たち

——書評への反批判——

堀 江 英 一

I 意見の相異

わたしが武暢夫・松村幸一・尾崎芳治の3君の研究成果を『イギリス革命の研究——その農業変革を中心として』に編集したのは、わたしの渡欧直前の1962年12月であった。わたしたちは、そのなかで、大塚久雄氏を中心として形成されてきたイギリス革命理論を批判し、それにかわるただしい理論を提供しようとしたのであるが、わたしは最初にイギリス革命史になじみのないかたがたのために簡単に両者の意見の相異を素描しておきたい。

大塚氏を中心として形成されてきたイギリス革命理論は、要約してしまえば、つぎのような2段階の理論からなっている——

(1) イギリスでは、14世紀末に終局的に完成をみる労働地代の貨幣地代への転形（いわゆる「地代の金納化」commutation）を契機として次第に、一方では封建的な領主的土地所有は「実質上」解体して封建農民は「実質上」その土地の完全に自由な土地所有者（いわゆる「分割地所有農民」）に転化し、他方では資本主義的階級分解＝農業資本主義の発展はこうして成立した分割地所有農民相互間の富農と貧農とへの階級分解として進行した。

(2) こうした関係がすでに17世紀前半にいたるまでに相当に進行していたのであるから、イギリス革命はすでに完成していた領主的土地所有の「実質的」解体＝農民的分割地所有の「実質的」確立と分割地所有農民相互間の資本主義的階級分解を事後的に法認したにすぎない。通説は、こうした2つの段階の理論を通して、イギリス革命は農民的土地所有の勝利であり、現代イギリスの三分制の一環としての地主制度はこうした農民的土地所有の発展の分解結果であると、主張する。

わたしたちはこの通説につよい疑問をいだかざるをえなかった。今日のイギリスの地主階級の主流の社会的系譜は、通説のいうようにおなじ分割地所有農民から分割地を買い集めたひとびとから上昇した地主でなくて、反対に隷属する封建農民から土地保有を収奪して私有地として集積したかまたはそれを買いった領主階級でなかろうか。わたしはイギリス滞在中に、コーンウォール県が皇太子とウィリアム征服王以来のセント・

マイタル城の城主であるセント・オービン St. Aubin 家によって2分されているのを見たが、かれらは封建領主から直接的に今日の地主階級に転身したのではなからうか。そしてこうした転身こそが今日のイギリス王朝・貴族制度・貴族の上院制度を温存させた歴史的根源ではなからうか。通説のいうように、もし領主が農民に敗退してその土地所有を失ったとすれば、そうでないにしてもその力をよわめたとすれば、こうした王朝的・貴族的保守傾向はどう説明したらよいのであろうか。わたしたちはつぎのように考えるにいたった——

(1) 労働地代の貨幣地代への転化・貨幣地代の低減傾向は、通説のいうように封建的土地所有の「実質的」解体＝農民の分割地所有の「実質的」確立でなく、封建的土地所有の形態転化にすぎず、封建領主はやはり封建領主、封建農民はやはり封建農民であった。イギリス革命はこうして厳存する封建的土地所有の破壊の問題に当面していた。

(2) ところで、封建的土地所有は、簡単に要約してしまえば、隷属的な封建農民が土地耕作権として保有し、封建領主がその土地を領有して耕作農民から封建地代を収奪するというように、おなじ土地に農民の保有権と領主の領有権が重層している土地所有なのである。こうした封建的土地所有を商品経済に適合的な自由な土地所有に改造するためには、領主が農民の保有権を収奪して領有地を完全な私有地に転化してしまうか（封建領主の地主階級への直接転化）、農民が領主の領有権を買いとるか収奪して独立自営の農民になるか（農民の分割地所有の確立）、そのどちらかの方法しかない。わたしたちは、通説と反対に、イギリス革命はこれまで非合法でおこなわれた匪徒運動における領主の農民収奪を法認したものであると、考えた。

わたしたちが『イギリス革命の研究』でこうした見解を体系的に展開してから、すでに2年半の月日が経過したが、わたしの知るかぎり、6人のかたがたから書評のかたちで批判をいただいた——

福富正実「ふたたび堀江教授の封建制拾象説の自己破綻について」（山口経済雑誌 第14巻第2号）

河野健二「市民革命研究の課題」（新しい歴史学のために No. 84）

吉岡昭彦「堀江英一編『イギリス革命の研究』」（週刊読書人 昭和38年2月25日号）

毛利健三「堀江英一編著『イギリス革命の研究』の方法をめぐる」（歴史学研究 No. 275）

浜林正夫「堀江英一編『イギリス革命の研究』」（西洋史学 LVII）

水田 洋「堀江英一編『イギリス革命の研究』」（史学雑誌 第73編第6号）

これらの批判はすべて通説の立場からわたしたちのイギリス革命理論に反対している。ふだんは大家史学に反対であると自称しているひとびとさえ、具体的なイギリス革命に

なると、基本的な論点では不思議にも大塚史学的通説に同調してわたしたちに反対する。わたしたちがこうした批判をうけるだろうことははじめから予想し覚悟していたが、批判者たちがこれほどまでに同じ調子をとろうとは思わなかった。通説へのわたしたちの抗議は「専門家」の間では不発に終わったようだ。

だが、「専門家」たちはよく自分の過去に固執するものである。「専門家」たちをわたしたちに同調させようなどと考えるのは無理なことなのかもしれない。わたしはここでは一般のかたがたに批判者とわたしたちとの争点を理解していただくこととしたい。

II 封建的土地所有の問題

批判者たちとわたしたちとをわける分岐点はすでに出発点からある。わたしたちは、イギリス革命当時に封建的土地所有が厳存し、絶対王政の国王大権の法源がこの厳存する封建的土地所有にあり、イギリス革命がブルジョア革命であるのは何よりもこうした封建的土地所有の破壊を政治課題として上程したからであると、考える。批判者たちはわたしたちに反対する。

ふだん大塚史学に反対する福富正実君と河野健二氏は通説を極限までおしすすめる

福富正実君。「農奴制の消滅は貨幣地代の成立と同時に農奴解放の過程としてあらわれるが、この農奴解放の過程では、農民は金を払って農奴制的隷属にもとづくいろいろの地代支払義務を免れて、自分の耕作地の完全所有権をもつ独立農民に転化するにいたる」(69頁)。

河野健二氏。「封建的看板を買取りさえすれば、完全な所有者になれるはずである。……そのための土台は革命前にすでにできあがっており」(3頁)。

たしかに14世紀の貨幣地代の確立は、封建的土地所有関係を弛緩させはしたが、それを解消させたわけでなく、賦役義務の隷農 villain を貨幣地代を支払う謄本土地保有農 copyholder・慣習土地保有農 customary holder に転形しただけである。かれらが封建的土地所有から解放されていわゆる自由土地保有農 freeholder (分割地所有農民)になる一つの方法はかれらが封建領主から地代支払義務を買いとることである。福富君と河野氏はここまでではたしい。だが、両氏は完全に史実をまちがえている——買取りに

- 1) 福富君は「もしも堀江教授が地代論的に正しい封建制捨象説をくみだてようとするのであれば、『封建的看板によって隠蔽された自由で自営の農民の土地所有』を真正正銘の『農民の分割所有』としてあらかじめ規定し、しかるのちに『封建的看板』=『封建制』を捨象すべきであろう」(72頁)という。だが、「真正正銘の『農民の分割所有』としてあらかじめ規定」するということは、『封建的看板』=『封建制』はすでに解体してしまっていることを意味するはずであり、すでに解体してしまった「『封建的看板』=『封建制』を捨象」するなどということはできない注文である。

よって贖本または慣習土地保有農が自由土地保有農に上昇した事例はなかったというわけではないが、イギリスでは圧倒的多数の農民が革命当時なお贖本または慣習土地保有農にとどまった。両氏はイギリス史のこの常識をごぞんじないのであろうか。

そればかりではない。農民が封建地代支払義務を買取って自由土地保有農になったとすれば、そのかぎりでは土地を売った領主は当然領主でも地主でもなくなっているはずである。それにもかかわらず両氏は反対のことを平気でいう——

福富正実君。「16-17世紀前半において土地所有権は依然として封建領主のものであった」(72頁)。

河野健二氏。氏が7年前の『市民革命論』ではじめて「イギリス革命は『プロシヤ型』の革命だと述べたことを誇っている(1頁)。

封建領主から解放されたはずのおなじ分割地所有農民が、同時になお封建領主に支配されたりまたかれによってその土地を収奪されたりするという。まったく筋の通らない話でなかろうか。

イギリス史の専門家たちはこんな筋の通らない話をしない。かれらは慎重な間接法—吉岡昭彦氏の「封建制(領主権)の実質的解体」(週刊読書人)という論法で封建的土地所有を「解消」させる。それは二重の理論から構成されている——

(1) 貨幣地代の成立=「地代の金納化」は、封建的土地所有の形態転化であっても、それによって封建領主がなくなったわけでも、隷農が自由土地保有農になったわけでもない。さらに福富君や河野氏がいうように登録または慣習土地保有農が領主権を買取って自由土地保有農に上昇したという大量的史実もない。領主—農民間の封建的土地所有関係は「法形式」としては厳存している。だが、封建的土地所有はつぎに述べるように「実質的」に解消していたのであって、封建的土地所有の厳存を主張するわたしたちは「法形式」主義者なのだという。

(2) 封建的土地所有は「実質的」—経済的に解体していたという。第一に、「貨幣地代形態の全国的規模での成立、地代水準は貨幣価値の継起的低下傾向によって低落、農村構造をみれば社会的分業の広汎な展開」(毛利健三, 42頁)——商品経済の展開と貨幣地代の実質的低下によって、第二に、「この諸条件が農民層両極分解を開放的に展開せしめる土壤、かくして資本家的借地農・富農の一般的形成」(同上, 42頁その他。浜林正夫, 74頁)——農民層分解による資本主義的關係の一般的形成によって、農民は「実質

2) どうでもよいことだが、河野氏は「本書の基本視角は、この(河野氏の——堀江)考え方を継承しているが、どういうわけか私の仕事——『市民革命論』以後のものも含めて——には全然言及がない」(1頁)という。わたしは、「マルクスの引用は、はやらない」(3頁)などという河野氏は別として、いままで述べてきたように支離滅裂で実証にささえられていない河野氏のイギリス革命論を拒否しているのである。

上」分割地所有農民になり、領主は「実質上」封建領主でなくなった。浜林正夫氏は「もし封建的土地所有が事実上厳存していたことをしめすのであれば、経済外強制による農民からの収奪が、どのくらいの規模でつづけられていたかをしめす必要がある。これをしめすことが可能であろうか」（74頁）とわたしたちにせまっているところをみると、浜林氏は領主—農民間にはすでに経済外強制も消滅して貨幣的な契約関係が支配していると考えているようである。

大塚史学的通説のこうした封建的土地所有の「解消」方法は、筋が通っているようにみえて、実のところは筋が通っていない。ここでは、農民が「実質上」分割地所有農民に上昇するという第一の理論と農民層の両極分解の結果うまれる富農が領主との間にとりむす資本主義的借地関係についての第二の理論とがいとも簡単に結合されているが、この2つの事実はいわば二律背反関係にあるのではなからうか。マルクスも貨幣地代段階の封建的土地所有のこれら2つの解消形態の背反関係を指摘している——

「貨幣地代は、一そう発展すれば、……土地を自由な農民所有に転化させるか、さもなくば資本制的生産様式上の形態、資本制的借地農業者が支払う地代、とならざるをえない。

「貨幣地代とともに、土地の一部分を占有して耕作する小作人^{ワシタルザツネ}と土地所有者との間の伝統的な慣習法的関係が、必然的に、契約上の・実定法の明文によって規定された・純粋な・貨幣関係に転形する。だから、耕作する占有者は事実上、単なる借地農業者となる。この転形は、一面では、……旧来の農民占有者をだんだん収奪してその代りに資本制的借地農業者を置くために利用される。他面では、この転形により、従来の占有者は金を払って自分の地代支払義務を免れて、自分の耕作地の完全所有権をもつ独立農民に転化するにいたる」（『資本論』第3巻、青木書店版、1124-5頁。傍点引用者）。

「実質上」農民的分割地所有が成立するという第一の方向で封建的土地所有が解消するとすれば、封建領主は「実質上」解消し貨幣地代も「実質上」解消する。だが、資本制的借地農が一般的に成立するという第二の方向がつかぬとすれば、封建領主は旧来の農民占有者から土地を収奪するほど強力でなければならず、「実質上」解消してはいならない。一方が成立すれば、他方は成立することができない。

そこで両者の無理な融合がおこなわれる。

第1幕。封建領主はやすらかに墓のなかに眠り、解放された分割地所有農民は舞台全面におどくる——そこで独立農民は自らが富農と貧農とに分解して農業資本主義関係が生誕しつつあることを祝う。

第2幕。封建領主が突如として墓からいきかえり、舞台は一変する——封建領主は中・貧農の「実質上」の自由保有地をうばって自分の私有地にくり入れ、これを富農に定期

借地で貸します。

封建領主は墓のなかに眠らされたりたたき起されたり——これは中世の芝居のなかでは可能であっても、現実の俗世のなかでは起りそうにない。封建領主が中・貧農（ばかりでなく富農）の土地を収奪できたのは、主として、それが自由保有地でなく、封建的土地所有の不可分の内容としての登録保有地・慣習保有地であったからである。封建領主が低下する固定貨幣地代を補うためにファイン fine をつりあげ、さらに搾出地代 rack renting をしぼりとったのは、農民の土地が登録保有地・慣習保有地であったためである。封建領主が貨幣地代・ファインなどを搾出できたのは、自由な契約関係にもとづくのではなく、農民が登録保有地・慣習保有地をもつという事実の属性としての経済外強制のためである。

分割地土地所有の「実質的」成立による封建的土地所有の「実質的」解消から出発した「専門家」たるわが批判者たちも、最後には史実に屈服して福富君や河野氏とおなじ末路にたどりついた——「かくしてイギリスの場合、ブルジョア・地主独裁を特徴とする革命政権がいち早く樹立された」（毛利健三、43頁）³⁾。これがイギリス革命についてのただしい史実なのである。「地主独裁」が樹立されたからには、封建領主は「実質上」も解消していなかったものであり、農民的分割地所有は一般的には「実質上」も成立していなかったことになるのでなかろうか。

Ⅲ 「二つの道」の問題

いままで説明してきたように、批判者たちは、一方ではすべてイギリス革命の当面した土地所有は「真正正銘の」または「実質上」の農民的分割地所有である、封建的土地所有はすでに解消しており、イギリス革命はそれを事後的に法認したと主張し、他方ではイギリス革命は「プロンジャ型」土地改良を行ったといい（河野氏）、「ブルジョア・地主独裁」をうちたてたという（毛利氏）。しかもなおかれらは、この農民的分割地所有の法認と「プロンジャ型」土地改良または「地主独裁」との結合を「二つの道」理論⁴⁾とむすびつけようとする。だが、それは所詮むだな努力というものである。

毛利氏と浜林氏、とくに毛利氏は奇妙な「アメリカ型の道」の本質論を展開する——

- 3) 本来の大塚史学では、封建的土地所有の「実質的」解体＝農民的分割地所有の「実質的」成立という理論はクロムウェルのプロテクトレート政権＝「中産的生産者」層政権と論理齊合的に結合していた。イギリス革命の研究が進展するにつれて、大塚史学の論理齊合性は破綻して、ここで説明したように、封建的土地所有の農民的分割地所有の方向での実質的「解体」論は「ブルジョア・地主独裁」と結合するようになった。その転機は寄生地主制論争である。
- 4) マルクス主義における「二つの道」理論の形成過程については拙編『市民革命の理論』第2編、「二つの道」理論そのものについては『改訂産業資本主義の構造理論』第5章をみていただきたい。

毛利健三。「アメリカ型の道の本質は、農民層の両極分解の開放的展開を基軸とする資本主義の発展である。そしてかかる発展の型を保障し促進するブルジョアの変革こそアメリカ型土地変革とよばれるにふさわしい。イギリスはまさにそうであった」(42頁)。

浜林正夫。レーニンについて書いた後で、「農民的土地所有が進歩的とか反動的とかいうのは、資本主義的生産力の発展に対しての意味であって、政治的な意味ではなく、またわたしは二つの意味がかならず一致するものでないと考えている」(75頁)。

批判者たちにとって、「アメリカ型の道」または「アメリカ型土地変革」の本質は、「農民層の両極分解の開放的展開を基軸とする資本主義の発展」「資本主義的生産力の発展」を保障し促進すればそれで充分であり、ただそれだけであり、そうした変革が誰によって誰にたいしておこなわれようと、従ってそれがもつ政治的意味などということとは「アメリカ型の道」とはなんの関係もない無縁の存在である。こうしてかれらは、封建的土地所有が解消し農民の分割地所有が確立する方向を確定したといって「アメリカ型の道」を提起し、「アメリカ型の道」を提起しながら「ブルジョア・地主独裁」政權をうたいあげる。「アメリカ型の道」という以上は、批判者はレーニンの「二つの道」理論における「アメリカ型の道」のことをいっているのであろうが、もしそうだとすれば、レーニンのこの理論は批判者とは内容も、とりわけ「魂」もちがう。レーニンの「二つの道」理論は、第一に厳存する封建的土地所有を破壊するブルジョアの変革の方法についての理論であるが、批判者たちにとっては封建的土地所有は解消しており、破壊さるべき封建的土地所有は存在しないはずである⁵⁾。第二に、「アメリカ型の道」は、厳存する封建的土地所有を破壊する革命の方法—農民が封建領主から土地を収奪して封建領主を追放する民主的変革方法で、それは「プロジャ型の道」とむすびつく立憲君主制に対立する民主共和制と不可分にむすびついているにかかわらず、批判者たちの「アメリカ型の道」は反対に領主が農民を収奪することをゆるす道であり、「ブルジョア・地主」独裁への道なのである。

福富君は、さきに強引に封建的土地所有を解体させて農民の分割地所有の一般的成立を確認したのであるから、「その経済的基礎が欠如しているという理由によってプロジャ型の成立の余地はすでに客観的に存在せず」(76頁)というかぎり筋が通っており、河野氏よりはるかにすぐれているが、しかしそうなると領主が農民を収奪したイギリスの原始蓄積過程を「アメリカ型の道」といいくるめなければならない。そこで福富君はもう一度強引さを発揮する——

5) また河野氏はイギリス革命について「プロジャ型」の革命というが、さきに述べたような氏の前提のもとでそんな問題を提起することそれ自身がまちがいだということになる。

「農民のコースとブルジョア・地主的コースの対立は、基本的には、アメリカ型の道の内部における二つの階級的・政治的路線の対立にほかならなかったのである」(76頁)。福富君はとうとう、農民が領主を収奪して民主主義をうちたてようが、反対に領主が農民を収奪してブルジョア・地主独裁をうちたてようが、そのどちらも「アメリカ型の道」にいてしまう。

こうして批判者たちはレーニンとは縁もゆかりもない「アメリカ型の道」をイギリスのなかに「創造」してわたしたちを攻撃する⁶⁾。批判者たちにとって、「アメリカ型の道」は、たれがたれを収奪しようとうんでもよいことで、資本主義が発展する道であり、「プロンヤ型の道」とは、その反対に、資本主義の発展をおくらせ奇形化する農奴制的封建主義だけなのである(毛利健三、41-2頁。福富正実、76頁)。

ただそれだけである。もともと大塚史学は農民解放と民主主義との歴史学であったが、批判者たちの階級的・政治的無関心さ、民主主義に対する不感症はどうしたことだろう。かれらはレーニンの「魂」をうしなっているのではなかろうか⁷⁾。職闘的な浜林氏でさえ、これを見おとしている。

だが、批判者たちがイギリス革命について「二つの道」をとくので、わたしはそれをレーニンの理論かと思いがちをしたが、かれらの「二つの道」理論はマルクス＝エンゲルスともレーニンとも関係がなかったのである。わたしの思いがちがいらしい——

毛利健三。「資本主義批判に関しては、上からの資本主義と下からの資本主義とが本質上区別されなければならない理由は全くない。われわれはここでレーニン『二つの道』理論が世界史の帝国主義段階に提起されたことに注意しなければならない。この段階において歴史の現実が上からと下からの二つの道を経てする資本主義の発展を客観的に可能にし、したがって『二つの道』理論の問題提起が意義喪失しない段階……において、下からの道を支持するとすれば、それはこの道こそ資本主義揚棄の主体的＝客観的諸条

6) 毛利氏はわたしを批判して、「氏は『封建的看板』だけをつかたれることによって事実上農民層分解を抹殺された。イギリス土地変革を論ぜられる際には、資本家の借地農・富農・半プロの貧農もただ『農民』一色に還元され、その対極では、あらゆる土地所有者も『封建領主』一本槍である」(41頁)という。わたしはこの非難をよるこんで甘受する。わたしたちは、資本主義を論ずるときには、農民層の両極分解を重視するしまた実証した(第2章参照)。だが、ここで問題になっているのは資本主義の発展一般ではなくて、封建的土地所有の破壊をめぐる領主と農民との対抗であり、そのときには富農も貧農もおなじ封建農民として領主に対抗する。農民一揆のながい歴史がこれを実証している。毛利氏の頭には資本主義はみえるが、反封建闘争＝ブルジョア革命だけはみえないらしい。

7) この視点からの毛利氏への反批判は尾崎芳治「レーニンの『二つの道』理論とイギリス革命の土地変革」(土地制度史学 第22号)にくわしく展開されている。わたしがここで問題にしている「二つの道」理論は、レーニンがロシア第一次革命という現実のなかで展開した具体的な「二つの道」理論から抽象した一般性＝封建的土地所有のブルジョア的変革における領主路線と農民路線との対抗の、イギリス革命への適用である。

件を急速に成熟させるという見透に立つからであり、決して下からの資本主義を美化して永久化するためではない」(39頁)。

水田洋。『二つの道』については、マルクスもレーニンも、それぞれ自分の国のブルジョア革命から社会主義革命への展望をふくめてかたったのだと、ぼくは考えるので、その着想を現在、イギリス革命に適用することの理論的および政治的有效性を、相対的なものとしてしか評価することはできない」(87頁)。

両氏のいう通り、現代はプロレタリア革命・社会主義革命の時代であり、レーニンの「二つの道」理論またその原型としてのマルクス＝エンゲルスの「ルーテル的＝騎士的反対派」と「平民的＝農民的反対派」との対抗路線理論が「社会主義革命への展望をふくめてかた」られた「ブルジョア革命」理論であることはたしかである。批判者たちは、だから「二つの道」理論をイギリス革命に適用するのは、まちがいだという。それなら、はじめから「アメリカ型」とか「プロシヤ型」とかいわない方がよかったのだ。だが、「二つの道」理論・総じてマルクス主義のブルジョア革命理論がどうしてイギリス革命・総じて古典的ブルジョア革命の研究に役立たないというのだろうか。わたしは、批判者たちとは反対に、マルクス＝エンゲルスのドイツ革命への参加・レーニンのロシア第一次革命の指導こそがフランス革命、イギリス革命、さらにはドイツ農民戦争の本質をあきらかにしたと、考える。批判者たちは、マルクス主義のブルジョア革命理論が現代のブルジョア革命の理論であるという理由で、そのイギリス革命への適用を拒否し、実質的には農民でなく領主を支持するが、エンゲルスはかれの『ドイツ農民戦争』のなかで、批判者たちとは反対に、自分たちのブルジョア革命理論を発見し、「ルーテル的＝騎士的反対派」に反対して「平民的＝農民的反対派」を支持した。わたしも、かつての大塚久雄氏とおなじく、この「魂」だけはうりたくない。

IV 三分制の成立の問題

わたしは、いま問題にしている書物のなかで、「多分に仮説的説明になるが」とことわったうえで、わたしたちが主張しようとする「プロシヤ型」土地変革がイギリス農業の三分制にどのようにつながるかを、簡単に説明した。わたしが「多分に仮説的説明になるが」とことわった理由はいくつかある。第一に、松村君がわたしたちの書物のなかで三分制の萌芽形態を実証したが、わたしたちはまだその本格的な実証をはたしている

8) 尾崎芳治「ブルジョア革命研究の基礎視点」(新しい歴史学のために No. 90)はこの視点における毛利氏への反批判である。

尾崎君の以上の2つの論文は好論文であるが、かれは自分の役割をまちがえているようである。われわれの間でイギリス革命の解釈があらそわれているとき、かれはそれをぼうり出して「二つの道」理論だけに突進している。

とはいえないからであり、第二に、イギリス自身でも、資本制の小作農にかしだされる農地の形成と資本制の小作農が雇傭する農業労働者の形成は困込運動または地主制研究として行われてきたが、肝心の経営者である資本制の小作農が、いつから、どのように、どこから形成されたかはかならずしも実証的に充分究明されていないからである。サースク夫人とヒルトン氏に手紙でたずねたところ、サースク夫人は複雑な問題でまだ研究されていないとこたえてくれたし、ヒルトン氏が教えてくれた文献にはこの問題にこたえてくれる部分は全然なかった。それは別として、わたしの説明はまちがっているという——

河野健二。「本書は、右のような絶対王政下の富農層が領主私有地での資本家借地農に転化する場合、富農は必ずその保有地を領主に収奪され、そしてイギリスに典型的な三分制度が生れるのだと説いている。『否定的に媒介される』とか、何とかむづかしい説明があるが、要するに封建的土地所有があるかぎり、農民的土地所有はありえないという考え方が前提されているからであろう」（3頁）。

吉岡昭彦。「イギリス革命プロシヤ型論は農業三分割制の早熟の展開を説明しえない。編者はこの点について苦悩しておられるが、正直なところこの説明はさっぱり理解できなかった。この点が解明されない限り、著書達のイギリス革命プロシヤ型論は説得性と有効性をもちえないのであるが、恐らくはそれは解決不可能な誤まれる問題設定なのであるまいか」（週刊読書人）。

おなじような批判が水田氏の書評のなかにもみられる（88-89頁）。紙幅の余裕がないので、一切の中間項をぬいて答えることをゆるしていただきたい。

河野氏らは封建的土地所有と農民的分割地所有がおなじ土地で両立できると夢想しているが、これは全くのまちがいである。そこで、事実ではないが、河野氏にしたがって、かりにすべての農民が貢租義務をかいとって分割地農民になったとする。こうした仮定のもとで、現代イギリスの大地主制度が成立するためには、都市・農村のブルジョアがこうした分割地所有農民から農民的分割地を価格通りに買いとって集積するほかない。フランス革命後のフランスではこうした集積過程が進行しただろうが、イギリスの囲込運動は、全体としてみれば、これと反対に、領主が農民の祖先伝来の保有地を暴力的に収奪したのでなかろうか。河野氏は『資本論』第1巻第24章第2節「農民からの土地の収奪」をどうよむのだろうか。さらに河野氏は農民層の両極分解を過重評価するとわたしたちを批判するが（2頁）、それならば資本家の借地農の成立をどう説明するつもりなのだろうか。わたしはこうした疑問に河野氏がこたえてくれるように希望したい。

わたしはつぎの2つの史実に立脚している。資本制借地農業者の成立についてのさきのマルクスからの引用を史実にそくして説明すれば、こうである——

(1) それが旧来の封建領主であれ、領有権をかいとってブルジョア・官僚から転身した

封建領主であれ、かれは自分の領有地に昔ながらの占有権をもつ農民から非合法に（第一次囲込運動）また合法的に（第二次囲込運動）保有地を収奪して、旧来からの私有地である直営地に編入する。農民が富農であれ貧農であれ、かれらの保有地が登録保有地または慣習保有地であるかぎり、それは収奪される。マルクスのいう「この転形は……旧来の農民占有者をだんだん収奪して」という命題および囲込運動はこの過程である。

(2) この収奪過程は、同時に、土地を収奪された中・貧農には土地をふたたび貸さないで農村から追放し、土地を収奪された富農とかペイリフにはさきの中・貧農から収奪した土地をくわえて今度は定期借地形態 leasehold で貸しだすことに利用される。さきには登録または慣習保有農としての富農だった封建農民は、さきの収奪過程を媒介として、われわれがいまのイギリスにみるような資本制的借地農に転化する。つまり「否定的」に媒介されている。マルクスの「その代りに資本制的借地農業者を置くために利用される」とはこの過程なのである。わたしの論理は、封建的土地所有のもとでの農民層の両極分解→領主による農民保有地の収奪→両極分解の暴力的加速化と三分制の成立という順序に従っている。吉岡氏の同情にはありがたく感謝しているが、わたしは苦悩などしていないことはおわかり願いたい。

わたしは、それが資本主義を発展させ三分制を促進したことを吉岡氏とともに充分にみとめつつも、領主による農民収奪であって農民による領主の収奪でなかった点で、イギリス革命を「プロジャ」型と考える。これに対する唯一可能な反対論は、究極するところ、誰が誰を収奪しようとするでもよいことで、とにかく資本主義が発展すれば、それは「アメリカ型の道」であるということになる。これはアメリカがマルクス主義に對抗して注入しようとしているアメリカ的歴史観そのものではないだろうか。

-
- 9) 福富君は「この動揺を生ぜしめた根本的原因は、封建制を過大評価し、大塚史学をあやまって近代主義として規定したマルクス・レーニン主義政党の科学路線の決定的な誤謬にあったことはあまりにも明瞭である」(67頁)と、わたしたちを攻撃する。一昔まえ、同君がわたしのセミナー学生であったとき、わたしは同君の「マルクス・レーニン主義政党の科学路線」の側からただけしい攻撃をうけ、いまはわたしは「マルクス・レーニン主義政党の科学路線」だと同君から攻撃される。10年の月日の間には、人間も歴史もかわるものだ！

だが、福富君！ 封建制を過大評価するのはたしかにまちがいがだが、封建制が敗存するとき、それを見ようとせず、それを敵としてたたかったひとびとを支持し尊敬しない学者はもう少しまちがっていないだろうか？ わたしは昔の大塚史学はいざ知らず、いまの大塚史学はアメリカ的近代主義と考えている。もう少ししいわしてもらえば、福富君もその1人と思っている。

封建領主であれ、かれは自分の領有地に昔ながらの占有権をもつ農民から非合法に（第一次囲込運動）また合法的に（第二次囲込運動）保有地を収奪して、旧来からの私有地である直営地に編入する。農民が富農であれ貧農であれ、かれらの保有地が登録保有地または慣習保有地であるがぎり、それは収奪される。マルクスのいう「この転形は……旧来の農民占有者をだんだん収奪して」という命題および囲込運動はこの過程である。

(2) この収奪過程は、同時に、土地を収奪された中・貧農には土地をふたたび貸さないで農村から追放し、土地を収奪された富農とかペイリフにはさきの中・貧農から収奪した土地を多くわけて今度は定期借地形態 *leasehold* で貸しだすことに利用される。さきには登録または慣習保有農としての富農だった封建農民は、さきの収奪過程を媒介として、われわれがいまのイギリスにみるような資本制的借地農に転生する。つまり「否定的」に媒介されている。マルクスの「その代りに資本制的借地農業者を置くために利用される」とはこの過程なのである。わたしの論理は、封建的土地所有のもとでの農民層の両極分解→領主による農民保有地の収奪→両極分解の暴力的加速化と三分制の成立という順序に従っている。吉岡氏の同情にはありがたく感謝しているが、わたしは苦惱などしていないことはおわかり願いたい。

わたしは、それが資本主義を発展させ三分制を促進したことを吉岡氏とともに充分にみとめつつも、領主による農民収奪であって農民による領主の収奪でなかった点で、イギリス革命を「プロンジャ」型と考える。これに対する唯一可能な反対論は、究極するところ、誰が誰を収奪しようとするよりもよいことで、とにかく資本主義が発展すれば、それは「アメリカ型の道」であるということになる。これはアメリカがマルクス主義に對抗して注入しようとしているアメリカ的歴史観そのものではないだろうか⁹⁾。

9) 福富君は「この動揺を生ぜしめた根本的原因是に、封建制を過大評価し、大塚史学をあやまって近代主義として規定したマルクス・レーニン主義政党的科学路線の決定的な誤謬にあったことはあまりにも明瞭である」(67頁)と、わたしたちを攻撃する。一言まえ、同君がわたしのゼミナール学生であったとき、わたしは同君の「マルクス・レーニン主義政党的科学路線」の側からただけしい攻撃をうけ、いまはわたしは「マルクス・レーニン主義政党的科学路線」だと同君から攻撃される。10年の月日の間には、人間も歴史もかわるものだ！

だが、福富君！ 封建制を過大評価するのはたしかにまちがいがだが、封建制が敷存するとき、それを見ようとせず、それを敵としてたたかたひとびとを支持し尊敬しない学者はもう少しまちがっていないだろうか？ わたしは昔の大塚史学はいざ知らず、いまの大塚史学はアメリカ的近代主義と考えている。もう少ししいわしてもらえば、福富君もその1人と思っている。